

第7章 関連文化財群の考え方

第1節 関連文化財群の考え方と設定の方針

有形・無形、指定・未指定に関わらず、歴史的な関連性や地域的な広がりなどの共通なテーマで歴史文化を価値付けることのできる文化財を関連文化財群とする。

関連文化財群を設定するにあたっては、「第5章西会津町の歴史文化の特徴」と「第6章にしあいづ物語100選」から描き出され、将来的に西会津町の魅力・特徴となることが期待されるストーリーを構成している歴史文化遺産のまとめを西会津町の「関連文化財群」とする。

文化財を単体として捉える考え方ではなく、関連する文化財を関連文化財群として捉えて一体的に保存・活用していくことは、単体としてはそれほど魅力を感じさせないものであっても地域の中での広がり・歴史的関連性という視点で見てみると人々の生活の一端が物語となって分かりやすく、かつ魅力的に見えてくる。群的な捉え方は単体としてはそれ程大きな魅力性のある文化財に乏しい西会津町にとって、文化財の価値を高め町内外へのアピール性を高めることにつながり、重視していかなければならないことである。

第6章で述べたように、文化財に親しみをもって理解してもらうために物語にしたので「個々の文化財=個々の物語」と捉えた。関連文化財群は「にしあいづ物語100選」と「西会津町の歴史文化の特徴」から構成されているが、大半の構成要素は「にしあいづ物語100選」であるため、「関連文化財群=関連物語群」と捉えている。

「第8章 にしあいづ物語100選活用事例」では、ほとんどが単独の物語(文化財)を活用しての町おこしの実践事例であるが、これからは埋れている物語(文化財)を掘り出して関連物語群を積極的に作り出し、地域・個人・関係団体等が情報の交換や連携した活動をすることが必要である。このような地域・個人・関係団体等に対して町は支援を行い、お互いに手を携えて取り組むことが過疎化の進む町の蘇生の1つの方法となるであろう。町の歴史文化の保存・継承・活用もこのような取り組みの中で初めて充実したものとなる。

第2節 西会津町の関連文化財群

上記、第1節から次の7つの関連文化財群を提示する。

関連文化財群(その1) 繩文文化の輝き

西会津町が最も輝いていた時代と思われ、町民の誇りとなっている。

関連文化財群(その2) 小領主たちの影響

中世の小領主層が江戸時代になると郷頭や肝煎となって村を支配し、現在までもその風土が残っている。

関連文化財群(その3) 陸運と舟運の要衝

古来より交通の要衝であったが、江戸時代には越後街道と阿賀川による陸運・舟運の重要地であった。現在でも陸路・鉄路の要の地であり、西会津町の歴史文化の展開に大きく関わっている。

関連文化財群(その4) 祈りと信仰

山岳信仰と仏教が人々の生活の中に共存しており、両者を生きる支えとして信仰し祈りを捧げてきた。この祈りと信仰は今でも継承されている。

関連文化財群(その5) 山と生業

山間地が多い当町では、山に関わる仕事で生業を立ててきた人々が多かった。その中で厳しくも独特の地域文化を生み出してきた。

関連文化財群(その6) 伝統行事や伝説・昔話

各地域で継承してきた伝統行事や語り継いできた伝説・昔話は地域の結束力を高め、独特の地域文化形成に関わった。

関連文化財群(その7) 自然災害と景勝地

様々な自然災害の爪跡の風景を景勝地として見直し、地域活性化に活かそうとする地域が増えていく。

■ストーリー

太平洋側の関東・東北地方の文化や北陸地方(信濃川流域)の火炎型土器文化との交流がうかがえる「会津タイプ」といわれる火炎土器や王冠型土器が出土する遺跡群がある。西会津町を含む会津地方西部(阿賀川・只見川流域)はこのように関東・東北・北陸の文化が混じりあう地域で、非常に学術的に価値の高い土器類を出土する。縄文中期から後期にかけては西会津町が全国的な文化の地として栄えた時代である。中心的な遺跡は芝草・小屋田遺跡と上小島遺跡であるが、発掘調査面積が一部だけであることに反比例して遺物の質の高さと量の多さから、相当な規模の遺跡であることが推測されている。両遺跡とも川原石を敷き詰めた敷石住居跡も出土しており、当時の生活の様子もしのばれるが、何に使用したのかよく分からぬものもありロマンを誘う。周辺にも未周知・未発掘の遺跡が埋蔵されている可能性もあり、すべての遺跡の全容が判明すれば大規模な縄文遺跡群が出現するかもしれない。

この他に旧石器時代と弥生時代の遺跡がわずかであるが見られる。弥生時代の遺跡からはめずらしい中空土偶が出土している。これらの遺跡は西会津町にとって超一級の文化財で町民の誇りでもある。



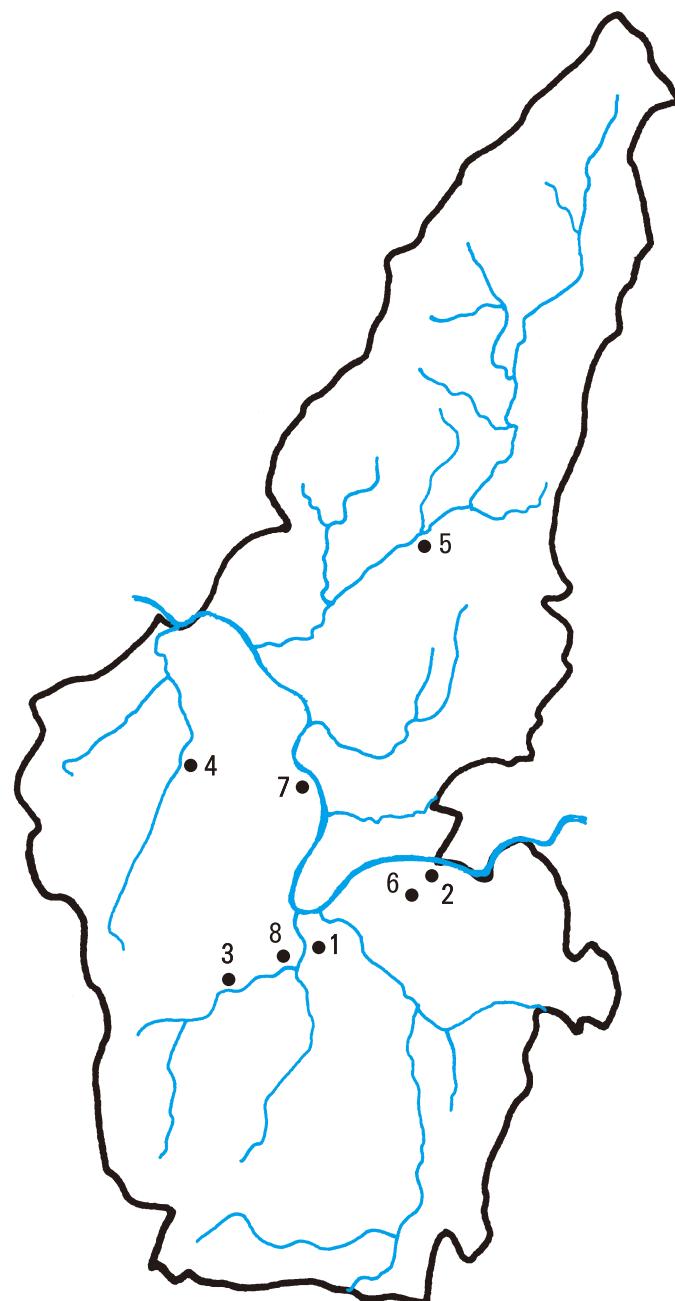
火炎土器(左)と王冠型土器(右) いずれも芝草・小屋田遺跡出土

関連文化財群(その1)

縄文文化の輝き 分布図

No.	主な構成要素	掲載頁
1	芝草・小屋田遺跡	91
2	上小島遺跡	94
3	塩喰岩陰遺跡	91
4	川谷遺跡	96
5	新井田遺跡	103
6	山本遺跡	93
7	上野尻遺跡	60
8	小中奈遺跡	91

* 概要は「第6章 にしあいづ物語100選」を参照のこと。ここではその掲載ページを記す。以下同じ。



関連文化財群(その2) 小領主たちの影響

■ストーリー

鎌倉～安土桃山時代、西会津町は会津盆地の芦名氏と新宮氏、只見川流域金山谷の山内氏それぞれの支配下にあった。阿賀川右岸域はほぼ新宮氏、左岸域は芦名氏、阿賀川支流の長谷川流域は山内氏支配下のそれぞれの家臣が小規模な館・山城を構え小領主として村々を支配していた。平地では館であったが山間地ではほとんどが山城となっている。これらの調査はまだ不十分であり、今後、より規模の大きい山城や各館間の関連性も明らかになる可能性がある。

芦名氏・新宮氏・山内氏の勢力関係は後年、芦名氏が全会津を勢力下に置くことになるが、長くは続かず伊達政宗に攻め滅ぼされる。その後、会津の領主は目まぐるしく変わるが、江戸時代初期になると3代将軍徳川家光の異母弟保科正之が入府し、子孫の松平氏が幕末まで統治する。会津藩の村落統治は身分は百姓であるが村役人という最下層の役人制度を作り実施した。村の中の村役人のトップは肝煎で、各村々の肝煎を統治したのが郷頭であった。郷頭は石高約1万石に1人任命された。この肝煎や郷頭に任命されたのは芦名氏・新宮氏・山内氏時代の村を治めていた小領主層が多くかった。時代は変わっても、これら小領主の村落経営の風土が色濃く残り、会津藩でも藩政改革で郷頭等の権限を押さえるのに苦心しているほどである。この小領主の村落経営の風土はその後の地域性形成に大なり小なり影響を与えており、現在でもその名残を感じさせるものがある。

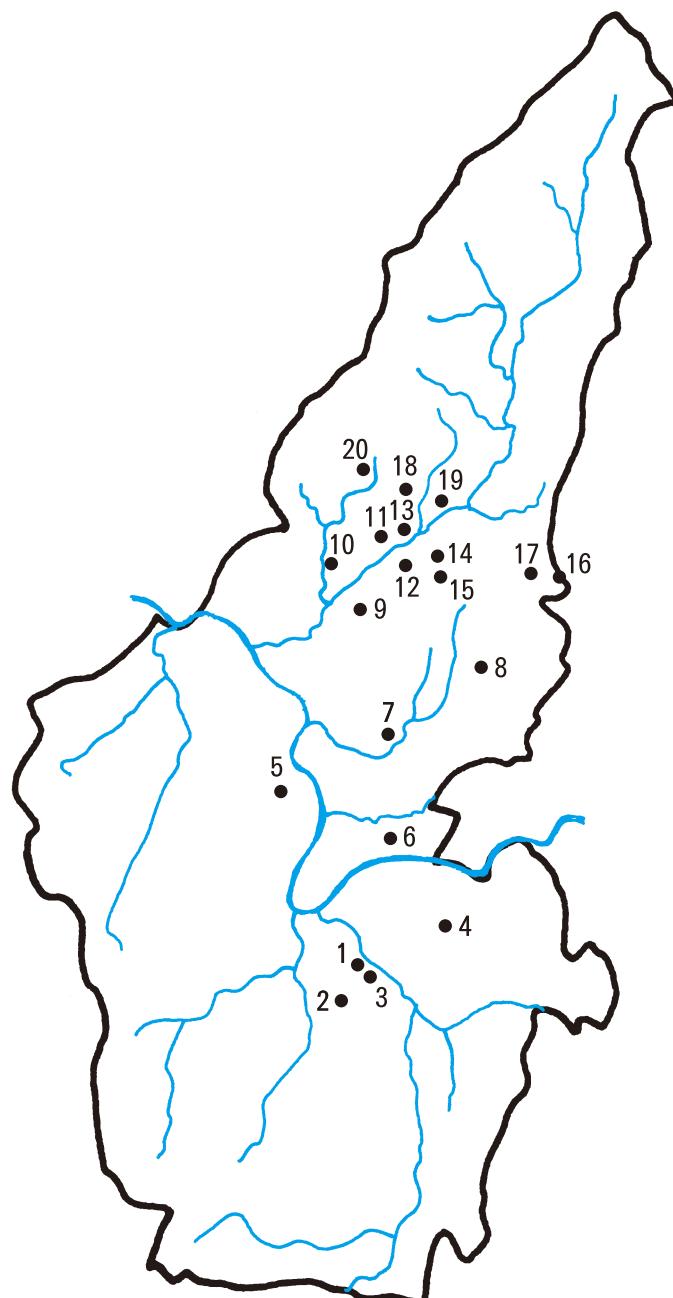


羽黒山館跡(雷山公園)

関連文化財群(その2)

小領主たちの影響 分布図

No.	主な構成要素	掲載頁
1	荒井館跡	90
2	羽黒山館跡	90
3	大槻館跡 大槻太郎左衛門の乱	50
4	宇多川館跡	52
5	蟹沢館跡	96
6	八重窪城館跡	99
7	城越館跡	69
8	館野山館跡	69
9	杣根沢館跡	102
10	八森山館跡	102
11	斎藤林館跡	102
12	柳沢館跡	102
13	奥川小山館跡	102
14	反田山館跡	102
15	丸山館跡	102
16	三境館跡	102
17	大船山館跡	102
18	越中林館跡	102
19	上田山館跡	102
20	権現山館跡	102



関連文化財群(その3) 陸運と舟運の要衝

■ストーリー

江戸時代になると幕藩体制が確立し、支配関係も明確になった。全国に街道・宿駅網は張り巡られ、運輸通信関係も全国共通のしくみが作られた。西会津町の主要街道は越後街道で、この本街道に接続して越後裏街道や村と村を結ぶ生活道が木の枝のように伸びて人々の生活を支えていた。山国西会津の街道は必ず峠を越して次の宿や村に通じており、人通りの多い街道には峠に茶屋があり旅人を助けていた。

また、街道は物流や旅人だけのものでなく、これに接続する道と一体となって政治・経済・文化・信仰など生きていく上で必要なすべてをつないで形作るものであり、世の中を動かすエネルギーを流す血管のようなものでもあった。

越後街道には宝川・白坂・下野尻・上野尻・野沢の各宿と軽沢の間宿があり、中でも野沢宿は越後街道3大宿場の1つで大変繁盛していた。この宿場の経済力が明治になって文化の面で花開くことになる。野沢の研幾堂(塾長:渡部思斎)という私塾から多くの偉人が巣立っており、宿場ではないが奥川からは宮城三平という知識人が出ている。

阿賀川は会津盆地の塩川から越後の津川まで主に廻米を運ぶ舟運の川道であったが、銚子ノ口が峡谷で激流の難所であったため、上・下野尻の川湊で荷物の積み降ろしがどうしても必要であった。そのため上・下野尻は大変栄えた。初めは下野尻に川湊があったが、大水で湊が被害を受けると上流の上野尻の方に湊が移るようになり、江戸の後期は上野尻が繁盛するようになる。

交通の要衝の地として街道・峠・川湊・宿駅は互いに密接に結び付き、西会津町の歴史文化の展開に重要な役割を担ってきた。現在も国道49号・磐越自動車道・JR磐越西線が町を横断しており、日本海と太平洋を結ぶ交通の要衝の地に変わりなく、人・物・文化の交流に大きく関わっている。

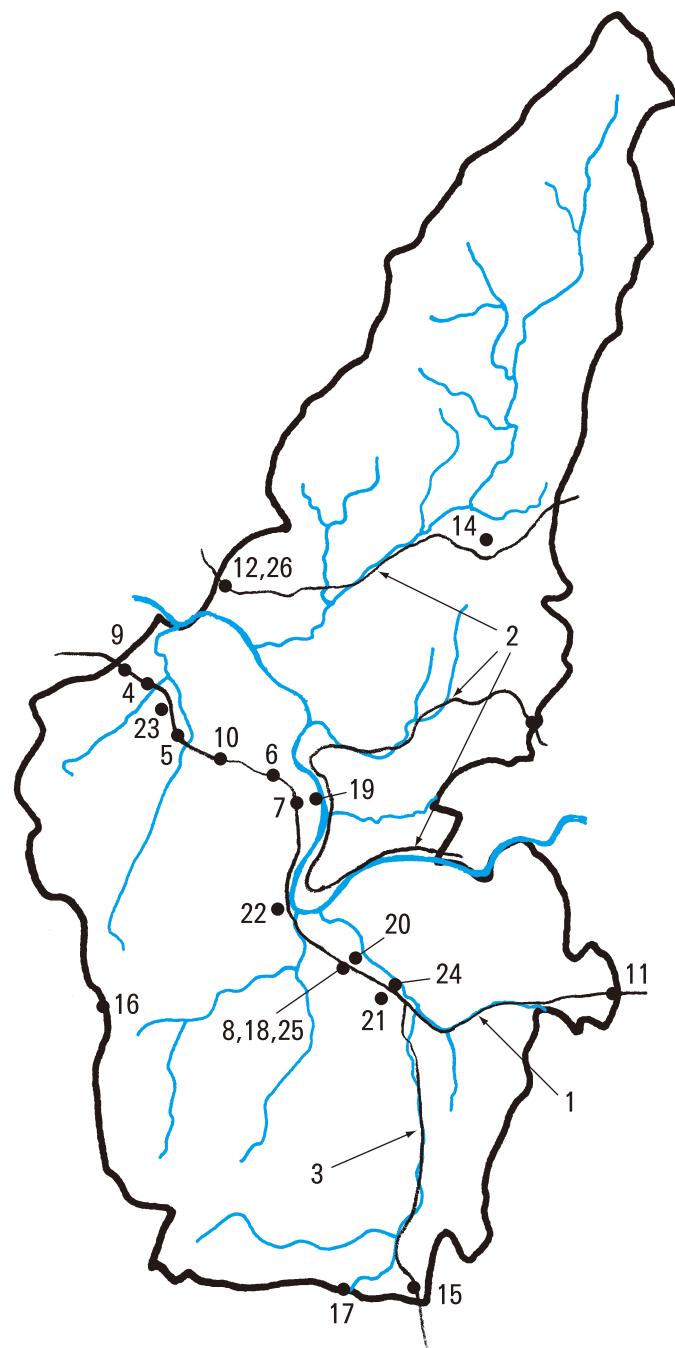


車峠にあった茶屋

関連文化財群(その3)

陸運と舟運の要衝 分布図

No.	主な構成要素	掲載頁
1	越後街道	59・81
2	越後裏街道	69・82
3	御蔵入街道	83
4	宝川宿	97
5	白坂宿	81
6	下野尻宿	81
7	上野尻宿	81
8	野沢宿	81
9	鳥井峠	85
10	車峠・茶屋	85
11	束松峠	85
12	楨木峠	86
13	陳ヶ峯峠	87
14	花立峠	87
15	杉峠	88
16	九才坂峠	87
17	乞食岩・出臍岩	94
18	研幾堂	47
19	舟運・川湊	59・84
20	代官所跡・代官清水	90
21	野沢の一里塚	90
22	芹沼の一里塚	90
23	宝川の一里塚	81
24	鉄火裁判	90
25	本陣・脇本陣	90
26	上様御小休所	102



関連文化財群(その4) 祈りと信仰

■ストーリー

西会津町には北に飯豊山があって古来より信仰の山であった。西は越後山地が連なり、山深い地であるため山岳信仰の修験道が盛んであった。西会津町域は真言宗系の当山派が主流で、白坂集落川谷の定蓮寺は延宝3年(1675)に当山派の会津四群の袈裟頭になったという。修験道の靈地は滝や険しい山地などで町内にも複数あるが、その1つに「野沢の山の神様」として新潟・山形・いわきなど町外に多くの信者を集めた大山祇神社がある、奥の院はまさに靈地である。

また、天台宗開祖最澄と仏法論争を重ねた法相宗徳一が開基したと伝わるお寺が会津には5つあるが、その内の2つ(如法寺・勝善寺)が西会津町にある。徳一は奈良の腐敗した佛教界を避けて会津の地で佛教の教えによる理想郷をつくろうと考え、磐梯山麓の恵日寺を中心にして佛教を広めた。如法寺は鳥追觀音として知られ会津三觀音(ころり三觀音)の1つになっている。觀音堂には左甚五郎作と伝わる隠れ猿(難よりかくれ猿・難をのがれ猿・安樂に暮らし猿)の彫刻がある。徳一開基と伝わるお寺の配置を見てみると会津の西端に南北に並び、越国に対して会津佛教界を守っているようにも見える。

鎌倉時代以降になると越後の僧が招かれているお寺も多くなり、越後との交流が佛教界でも盛んになってくる。また、山間地で他地域に出ることが難しかった奥川や新郷には觀音様巡りの信仰が盛んに行われ、その痕跡を今に伝えている。

このように西会津町は越後に隣接する山間地であったため、山岳信仰と越国に対する特別な思いがあったかもしれない佛教が共存し、人々の生活の中に現在まで息づいてきている。



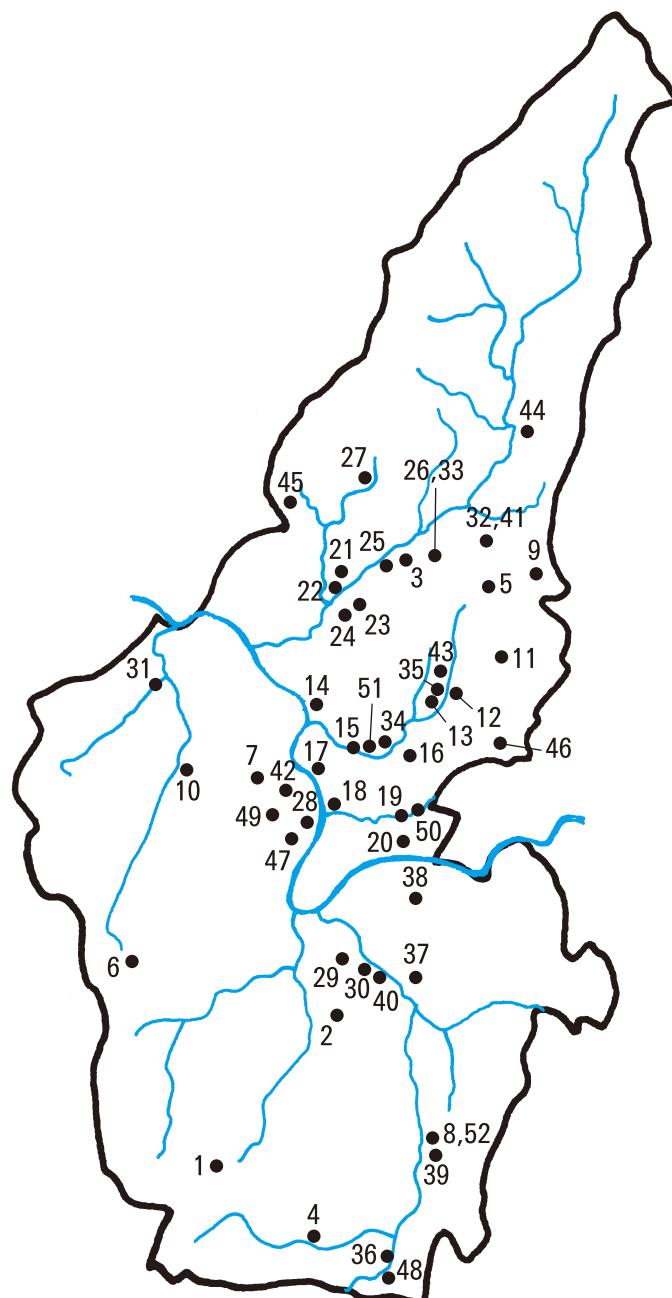
旧福聚院修験資料

関連文化財群(その4)

祈りと信仰 分布図

No.	主な構成要素	掲載頁
1	大山祇神社	44
2	如法寺觀音堂	44
3	寄光寺	102
4	大滝不動堂	57
5	旧福聚院修験資料	103
6	男滝・女滝	96
7	根拆神社	96
8	円満寺觀音堂	54
9	大舟沢の馬頭觀音	103
10	旧照谷寺	62
11	高目の觀音堂	72
12	呼賀の觀音堂	72
13	原の觀音堂	72
14	滝坂の觀音堂	72
15	滑沢の觀音堂	72
16	樟山の地蔵堂	72
17	柴崎の地蔵堂	72
18	橋立の地蔵堂	72
19	井谷の地蔵堂	72
20	八重窪の地蔵堂	72
21	奥川七觀音(羽黒山)	102
22	奥川七觀音(不求庵)	102
23	奥川七觀音(上臺岡)	102
24	奥川七觀音(一森)	102
25	奥川七觀音(野原)	102
26	奥川七觀音(嶺雲山)	102
27	奥川七觀音(高陽嶺)	102
28	西光寺(上野尻)	63
29	常泉寺	90
30	常樂寺	90
31	勝善寺	97
32	西光寺(小綱木)	103
33	龍泉寺	77
34	正源寺	100
35	向山の薬師堂	99
36	面倉薬師堂	57
37	子育て石 (龍藏寺薬師堂)	51
38	旧善応寺御正体	93
39	子育て地蔵(出ヶ原)	55
40	夜泣き地蔵尊	93
41	愛宕堂將軍地蔵	103
42	五職神経塚	61
43	呼賀稻荷神社	100

No.	主な構成要素	掲載頁
44	金蔵寺歡喜天社	74・103
45	岩屋虚空蔵菩薩	73
46	富士神社	66
47	諏訪壇	97
48	蝦夷神社	93
49	秋葉山神社	97
50	秋葉神社(力石)	99
51	天王神社	100
52	伊豆原山神社	94



■ストーリー

西会津町はかつて鉱山等の地下資源で栄えた町でもあった。金・銀・銅・亜鉛などの金属鉱床とオパール鉱床や緑色凝灰岩層があって、金属類は江戸時代から採掘され(坂内利三郎が有名)、緑色凝灰岩はコンクリートに押されるまで建築資材として大量に採掘利用された。緑色凝灰岩は安価で加工しやすいので塀・蔵の壁・石畳・墓石などに重宝されたが、風化や熱に弱いことがあって、次第にコンクリートにとって変わられた。粒子の細かいものは農作業用の刃物の砥石に使われ、百姓仕事にはなくてはならないものであった。鉱山は第二次世界大戦中まで盛んに採掘され、特に軍需用金属鉱床採掘の頃は山地がどこよりも活況を呈し、多くの人々が働いていた。鉱山は危険と隣合わせのため、昔は鉱山で働く人は無宿人など特別の人々であったが、戦争中は土地の人と他地域からの人がともに働く場所であった。

また、大正時代になると山間地の黒沢と奥川に小規模ながら水力発電が建設され地元に電力の供給が行われている。水力発電がしやすい河川であったためと鉱山などの産業と何らかの関係があるのかもしれない。

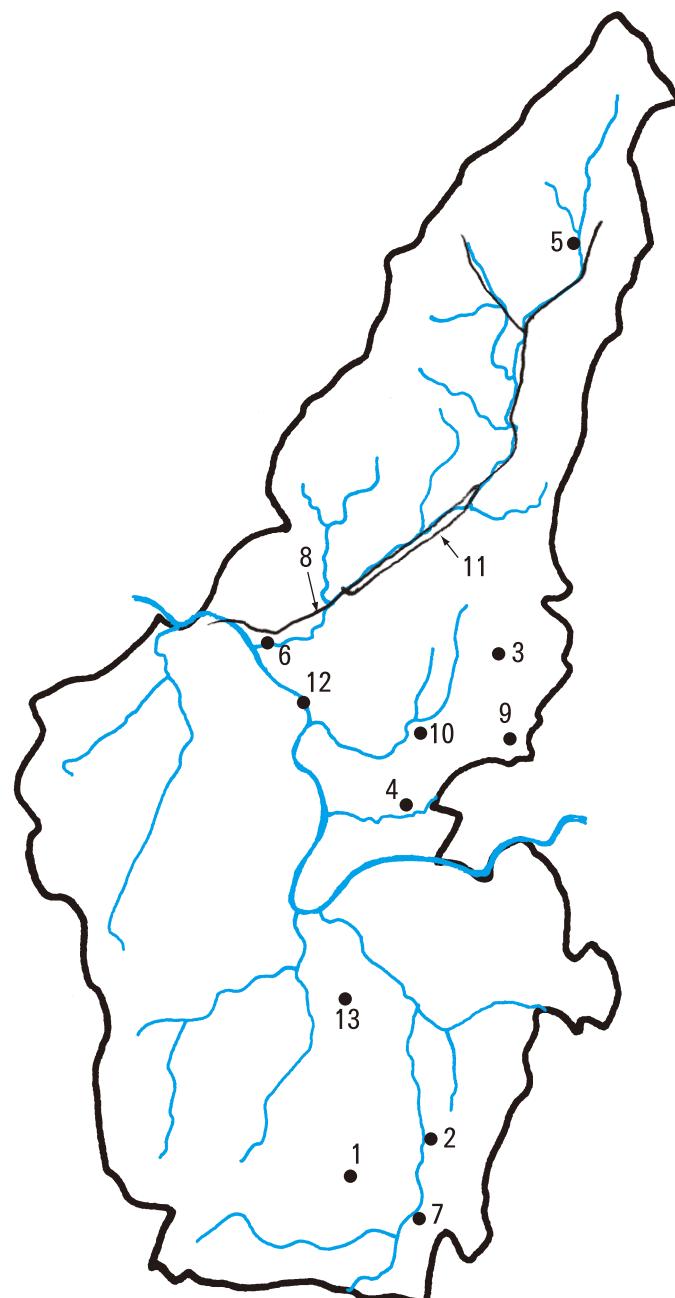
山間地である西会津町は木材伐採・炭焼き・木地づくり・紙漉きなど山に関する仕事で生業を立てていた者も多かった。少しでも平地の所には水を苦労して引き新田開発を行い、わずかでも生活がよくなるよう努力を重ねてきたのである。

多くの山間地に生きる人々にとって山は生計を立てる場所であり、少しでも改善したい場所でもあった。生活環境は厳しく、平地に生きる人々とは異なる生活環境の跡や独特の文化が作られたのであるが、継承が途絶えようとしている。



甲石での採石の様子

No.	主な構成要素	掲載頁
1	赤羽根鉱山跡 (坂内利三郎)	56・94
2	出ヶ原の紙漉き	55
3	高目のお椀作り	99
4	井谷の附け木製作	100
5	木地師と飯豊山参拝宿	103
6	奥川第一・第二発電所	102
7	黒沢発電所跡	94
8	奥川軌道(トロッコ軌道)	78
9	泥浮開村	99
10	新村	100
11	堰開削事業(五ヶ村堰)	76
12	架橋計画	68
13	杉木之覚碑	90



関連文化財群(その6) 伝統行事や伝説・昔話

■ストーリー

昔は5地区どこでも年中行事があった。伝統行事といわれるものである。伝統行事にはほぼ全地区で現在でもしっかり行われているもの(歳の神など)、そこまではいかないが一部の集落でのみ継承されているもの(百万遍など)、一時期、時代に合わないと途絶えたが再び有志によって復活したもの(虫送り・人形送りなど)、完全に途絶えてしまったもの(松尾神社管絆の神事など)とがある。行事や冠婚葬祭などの特別な日に作って食べた料理(ごちそう)も引き継がれているもの(こづゆなど)と、そうでないもの(鮫料理など)とがある。

継承されているものとそうでないものとの間に、狭い町の中でもわずかではあるが差異がある。歳の神が全地区で行われているのは年の初めの行事であるとともに、土着神信仰であるというのも興味深い。多くの行事は人の出入りの多い町場より山間地の集落で継承されていることが多い。厳しい生活を乗り切るには共同体としての連携が不可欠であり、集落としての結束力を高めるために行事があったし、行事があったから結束力が高まったともいえる。現在でも百万遍などの行事を継承している地区がわずかではあるが存在することは、その地区の結束力の強さを物語るものである。

西会津町の特別な日の料理は越後の食文化の影響を強く受け、会津でも他の地域とはかなり異なっている。さらに、材料などを細かく見てみると町内でも微妙に違っているのは、各地区のおかれたり歴史環境とそこから育まれた文化の違いではないだろうか。

西会津町には弘法大師や八幡太郎義家などの歴史上の有名人や、非業の最後を遂げた人から河童や狐などの動植物に関わるものまで多岐に渡る伝説や昔話などが各地に伝えられている。これらは人々の中で語り継がれた歴史的なもの、ほとんど根拠を感じさせないもの、眼前の事実を納得させる理屈付けをしたもの、生きていく上での教訓的なものまで含まれており、この地で生きる人々の生活にとって精神的な一分野を担っていたもので、その地の歴史文化といつても過言ではないであろう。

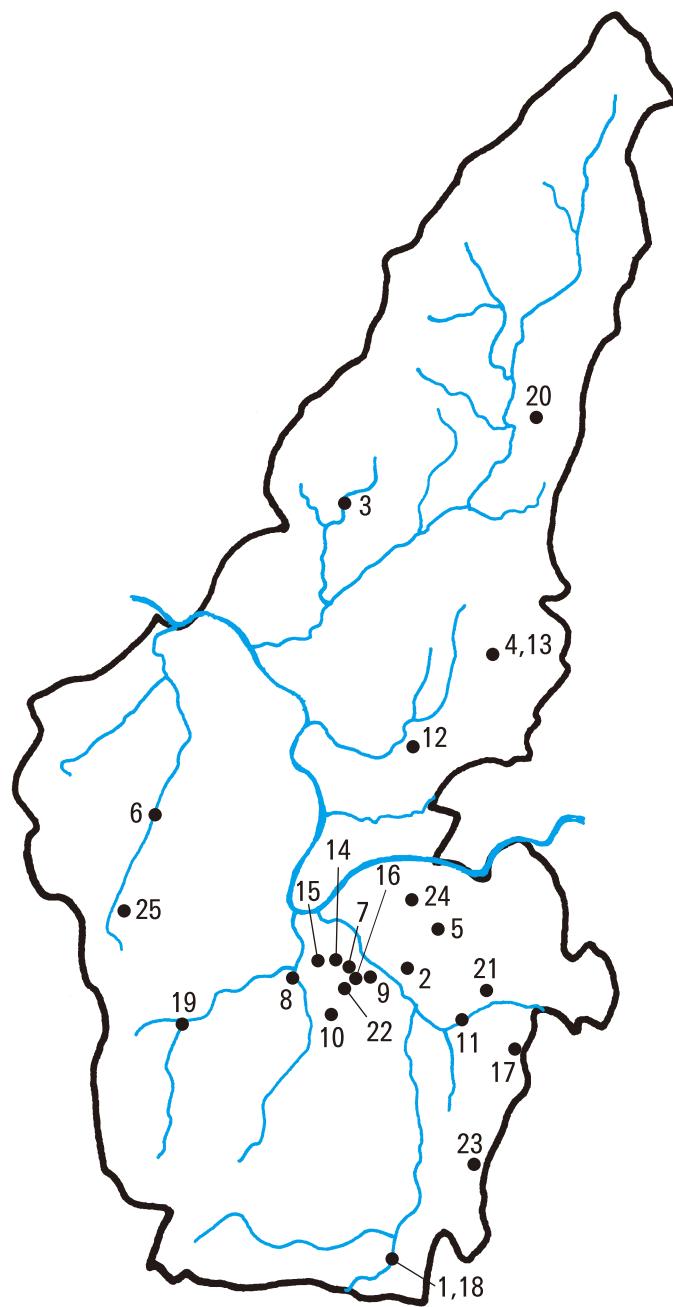


萱本の百万遍

関連文化財群(その6)

伝統行事や伝説・昔話 分布図

No.	主な構成要素	掲載頁
1	虫送りと鳥追い	94
2	萱本の百万遍	93
3	山浦の百万遍	103
4	富士の歳の神	99
5	松尾神社神事 新酒仕込お水取り	52
6	屋敷人形芝居と万歳	64
7	草刈・甚句踊り	91
8	河童のお化け	91
9	化け燈籠	91
10	角力とり仁王	91
11	不動川の河童	53
12	化ヶ物沢	70
13	化け猫	71
14	化け桜	43
15	本海壇	43
16	三狐物語	91
17	女房沢と機織滝・雨降滝	94
18	早乙女踊り	94
19	八蛇沼の大蛇と弘法大師	48
20	かけろうの滝	103
21	入小屋の追剥	93
22	中地の桜	90
23	一貫清水	93
24	オサイ神様	93
25	熊沢のおんば様	96



■ストーリー

自然災害は時代に係わりなく貧しい農民を襲う。山崩れ・地すべりや大水で一村壊滅というような悲惨な情況となつても人々はめげることなく立ち上がり、荒れはてた大地に立ち向かい、地域を再建してきた。人々はこの地で生活を営み、文化と歴史をつくり続けてきたのである。今までは祖先を襲い苦しめた自然災害の爪跡をうとましいものとして見てきたが、昨今、その爪跡が特異な景観を呈していることに気付き、美しいと感じる人さえ現れるようになった。祖先の大変な苦労の跡を景勝地として活かすことは、その地に新しい文化と歴史を刻む第一歩となる。

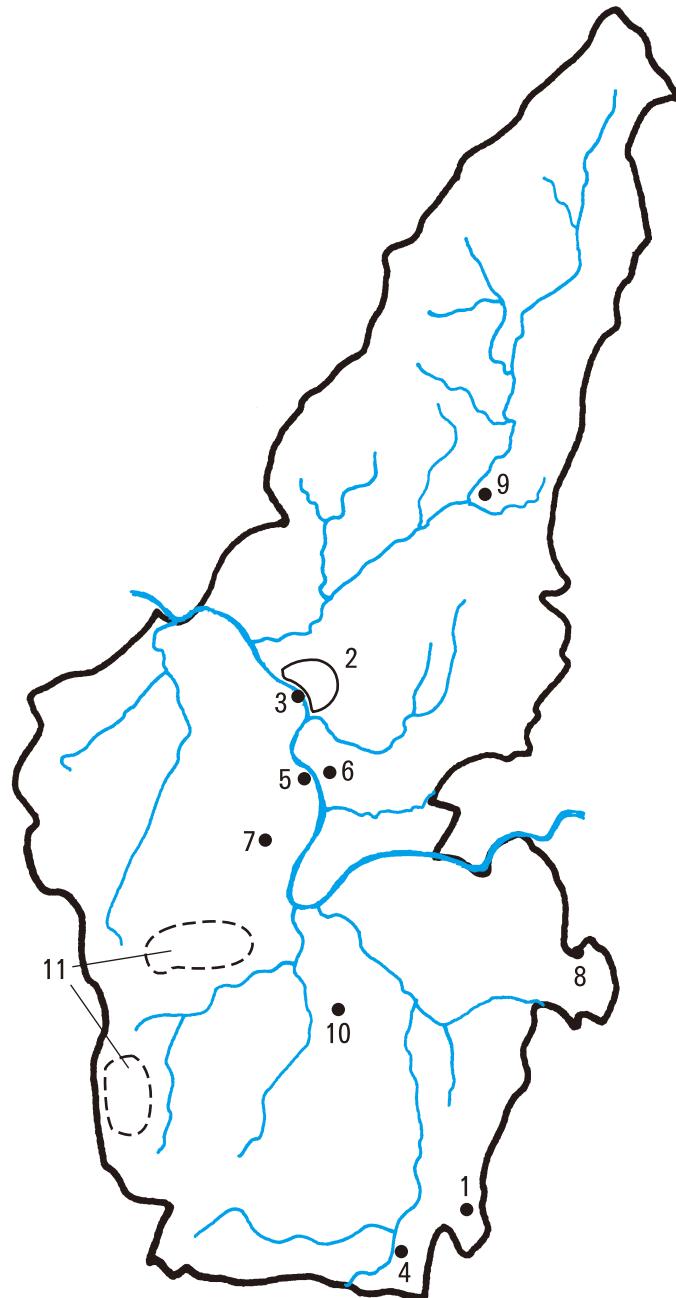
自然災害地には山崩れによる急峻な岩肌が露出する山やその下にできた沼、地すべりによってできた急崖などが見られるが、その近隣にも貴重な植物群や風光明媚な場所がある。これまで1つずつ単体としてバラバラに見ていたが、視野を広げ複合的に見てみると新しい景勝地が見えてくる。



大杉山村慶長地震遭難者供養等

自然災害と景勝地 分布図

No.	主な構成要素	掲載頁
1	大杉山村慶長地震遭難者供養塔	93
2	滝坂の地すべり	100
3	銚子ノ口	59・97
4	黒沢水害	94
5	上野尻発電所の桜	97
6	殉難碑	100
7	須刈岳	96
8	東松塩坪層の漣痕化石	93
9	かたくり群生地	102
10	如法寺のコウヤマキ	90
11	安座のコウヤマキ	90



第3節 歴史文化保存活用区域と関連文化財群

文化庁の「歴史文化基本構想」策定技術指針では、不動産である文化財や有形の文化財だけでなく、無形の文化財も含めて文化財が特定地域に集中している場合に、文化財と一体になって価値を形成する周辺環境も含め、当該文化財(群)を核として文化的な空間を創出するための計画区域として定めるのが望ましい区域を「歴史文化保存活用区域」とするとある。西会津町は文化財が特定地域に集中することはなく各地に散在している。このことから特定の歴史文化保存活用区域を設けずに各地区の文化財間の関連性に着目した関連文化財群を重視した町づくりに取り組む。